

Effect of hematuria on the outcome of IgA nephropathy with mild proteinuria.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 佳優 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/31340

主論文の要約

Effect of hematuria on the outcome of IgA nephropathy with mild proteinuria.

(血尿の程度が IgA 腎症軽度蛋白尿症例の予後に与える影響)

東京女子医科大学内科学 (第四) 教室

(指導: 新田 孝作教授)

田中 佳優

Clinical and Experimental Nephrology published on line 2014 Dec 5.

[DOI 10.1007/s10157-014-1068-9]

【目 的】

IgA 腎症の予後に影響する因子として、尿蛋白、高血圧、生検時の腎機能、生検所見などが挙げられるが、血尿の程度が予後に与える影響は未だ不明である。高度血尿に対する加療については議論の余地があり、本研究では IgA 腎症軽度蛋白尿症例に対して血尿の程度が臨床経過や腎予後に与える影響について検討した。

【対象および方法】

1980 年から 2005 年に当院で診断した IgA 腎症のうち生検時蛋白尿が 0.5g/日未満でステロイド、免疫抑制剤、扁桃摘出術を施行されず、生検後 1 年以上経過観察可能であった 88 症例を尿中赤血球が 1 視野に 20 未満の症例(L 群 48 例)と 20 以上の症例(H 群 40 例)に分け、臨床所見、組織所見、腎生存率、進行における危険因子について比較、検討した。

【結 果】

生検時臨床所見では H 群で有意に女性が多く、血圧が有意に低値だったが、

高血圧症例数は有意差を認めなかった。尿蛋白平均値と eGFR（推定糸球体濾過率）、オックスフォード分類による組織所見に有意差は認めなかった。腎生検 5 年後の蛋白尿中央値は両群ともに 0.5g/日または 0.5g/gCr 以下であった。尿中赤血球数は両群間に有意差はあるものの、H 群も無治療で尿中赤血球 10 個/視野以下に軽快していた。 Kaplan-Meier 法を用いた両群の 15 年腎生存率は H 群で 100%、L 群で 83.4%であり、有意差はなかった。レニン・アンジオテンシン（RAS）系阻害薬による加療はコックス回帰分析によると進行のリスクを減少させた（ハザード比 0.14、 $P=0.027$ ）。

【考 察】

本研究では経過中両群ともに蛋白尿は増加せず、血圧はコントロール良好で、腎障害の進行もほとんど見られなかった。軽度蛋白尿症例では血尿の程度は組織所見の重症度に関連せず、蛋白尿増加や末期腎不全、予後に関与しないと示唆された。これらはステロイドなどの積極的治療は行わないものの、RAS 系阻害薬を生検後初期から使用したことによると考えられ、RAS 系阻害薬は末期腎不全への進行を抑制すると示唆された。

【結 論】

生検時の高度血尿は積極的治療せずに軽快し、軽度蛋白尿症例においては血尿の程度による予後への影響はなかった。軽度蛋白尿症例での予後は比較的に、RAS 系阻害薬による加療は末期腎不全への進行を抑制すると示唆された。